

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 76歳の男性。半年前から左下眼瞼に腫瘤が出現し、徐々に増大したため来院した。左眼外眼部写真と病理組織像を別図 1A, 1B に示す。
診断はどれか。
a 黄色腫 b 脂腺癌 c 基底細胞癌 d 母斑細胞母斑 e 脂漏性角化症
- 2 28歳の男性。幼少時から左眼に視力障害があり、視神経乳頭部の先天異常と診断し、経過観察を行っている。矯正視力は右1.2, 左0.2。右眼には明らかな異常を認めない。左眼細隙灯顕微鏡所見を別図 2A, 2B に、眼底写真を別図 2C に示す。
所見はどれか。2つ選べ。
a 鎌状網膜剥離 b 網膜色素線条 c Mittendorf 斑 d 前眼部形成異常 e 硝子体動脈遺残
- 3 77歳の女性。右眼の白内障手術を目的に来院した。視力は右0.1(0.6×-4.25 D ⊂ cyl-1.75 D Ax 35°)。眼圧は右17 mmHg。左眼も同様の所見がみられる。右眼細隙灯顕微鏡写真を別図 3 に示す。
本症例に係るものはどれか。2つ選べ。
a Rieger 異常 b ぶどう膜欠損 c 穿孔性角膜外傷
d Chandler 症候群 e 視神経乳頭コロボーマ
- 4 52歳の男性。2か月前から左眼の霧視を自覚したため来院した。矯正視力は両眼ともに1.5。眼圧は右38 mmHg, 左28 mmHg。左下眼瞼の結膜円蓋部に硬結を認めたため結膜生検を行った。左眼隅角鏡検査写真と結膜生検の病理組織像を別図 4A, 4B に示す。
診断はどれか。
a 眼類天疱瘡 b 春季カタル c 悪性リンパ腫 d アミロイドーシス e サルコイドーシス
- 5 1,000人を対象として緑内障検診を行った。緑内障の有病割合を5.0%、検診の感度を90%、特異度を80%とする。陽性適中率を求める表を別図 5 に示す。
検診で緑内障疑いと判定された者が実際に緑内障である確率(陽性適中率)はどのくらいか。
a 約10% b 約20% c 約40% d 約60% e 約80%
- 6 52歳の男性。右眼の眼球突出を主訴に来院した。眼窩部 CT 像と MRI 画像を別図 6A, 6B に示す。
適切な対応はどれか。
a 抗菌薬点滴静注 b 眼窩腫瘍生検術 c 眼窩内容除去術
d 眼窩腫瘍全摘出術 e ステロイドパルス療法
- 7 34歳の女性。ドライアイのため数年前からヒアルロン酸ナトリウム点眼薬を頻回に使用している。数か月前から眼瞼皮膚の発赤と腫脹および痒みを訴えている。両眼の外眼部写真を別図 7 に示す。
最も適切な対応はどれか。
a 抗菌薬眼軟膏を処方する。
b 眼科用白色ワセリンを処方する。
c 副腎皮質ステロイド眼軟膏を処方する。
d 0.1%タクロリムス水和物軟膏を処方する。
e ヒアルロン酸ナトリウム点眼薬を中止する。
- 8 24歳の男性。小児期からアトピー性皮膚炎がある。2週前から眼瞼縁炎の発症を認め、その後充血を訴えて眼科を受診した。眼瞼縁の写真とフルオレセイン染色写真を別図 8A, 8B に示す。
適切な治療はどれか。
a 抗菌薬眼軟膏点入 b 抗真菌薬眼軟膏点入 c アシクロビル眼軟膏点入
d 副腎皮質ステロイド眼軟膏点入 e 0.1%タクロリムス水和物軟膏塗布

- 9 12歳の男児。右眼の異物感と充血を主訴に来院した。前眼部写真を別図9に示す。
この疾患の治療で著効するのはどれか。
a 抗菌薬点眼 b 免疫抑制薬点眼 c 抗アレルギー薬点眼
d アシクロビル眼軟膏点入 e 外科的切除
- 10 77歳の女性。3か月前から右眼の異物感があり来院した。前眼部写真と上眼瞼結膜写真を別図10A, 10Bに示す。
適切な対応はどれか。
a 抜糸
b 抗アレルギー薬点眼
c アシクロビル眼軟膏点入
d 0.1%タクロリムス水和物点眼
e 0.1%ベタメタゾンリン酸エステルナトリウム点眼
- 11 29歳の男性。「左の黒目が白くなってきた」という訴えで来院した。数年前に眼科通院の既往があるが詳細は不明。数年前から混濁があり、徐々に拡大してきたという。矯正視力は左0.7。前眼部写真を別図11に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 真菌性角膜炎が疑われる。
b 混濁はカルシウムの沈着による。
c 遺伝性の角膜ジストロフィである。
d 角膜新生血管に続発する病変である。
e 視力低下を来せば角膜移植の適応となる。
- 12 68歳の男性。急激な流涙と視力低下を主訴に来院した。前眼部写真を別図12A, 12Bに示す。
正しい所見はどれか。
a guttae b lucid interval c overhanging edge d pupillary block e Vogt's striae
- 13 76歳の男性。右眼の視力低下を主訴に来院した。右眼前眼部写真とフルオレセイン染色写真を別図13A, 13Bに示す。
診断に有用な検査はどれか。
a 角膜知覚 b 眼球突出度 c 抗CCP抗体 d アイステスト e 甲状腺ホルモン値
- 14 42歳の男性。両眼の角膜混濁に気づき来院した。右眼前眼部写真を別図14に示す。
考えられる全身疾患はどれか。
a 糖尿病 b 脂質異常症 c 関節リウマチ d 全身性強皮症 e 骨形成不全症
- 15 11歳の男児。出生直後からの右眼の角膜混濁で経過観察を行っている。右眼前眼部写真と前眼部OCT像を別図15A, 15Bに示す。
診断はどれか。
a Peters異常 b 後部円錐角膜 c Cogan-Reese症候群
d Axenfeld-Rieger症候群 e 後部多形性角膜ジストロフィ
- 16 13歳の女子。以前から近視と乱視があり眼鏡を装着していたが中学生になってから急に眼鏡が合わなくなり来院した。視力は右0.04(0.9×-7.50D ⊂ cyl-2.50D Ax 75°), 左0.09(1.2×-7.50D ⊂ cyl-2.50D Ax 75°)。眼圧は右14 mmHg, 左13 mmHg。散瞳時の右眼前眼部写真と波面収差測定の結果を別図16A, 16Bに示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 円錐角膜が疑われる。 b 全身疾患の検索を行う。 c 角膜高次収差の増加がみられる。
d 眼球高次収差の増加がみられる。 e オルソケラトロロジーが有用である。

- 24 16歳の男子。小児科で結節性硬化症が疑われ、眼底精査目的で来院した。眼底写真を別図24に示す。
誤っているのはどれか。
- a 難病に指定されている。 b 眼球摘出の適応である。 c 約50%に眼底病変を認める。
d てんかんや精神発達遅滞を伴う。 e 常染色体顕性遺伝(優性遺伝)である。
- 25 48歳の女性。左眼の見えにくさを自覚して来院した。視力は右0.7(1.2×-1.00 D)、左0.8(1.2×-0.75 D)、眼圧は右17 mmHg、左18 mmHg。2年前からIgA腎症に対して副腎皮質ステロイドとメトトレキサート内服により加療中である。左眼眼底写真を別図25A、25Bに示す。
適切な対応はどれか。
- a フルコナゾール内服 b ガンシクロビル点滴静注 c インフリキシマブ点滴静注
d ラニビズマブ硝子体内注射 e トリアムシノロンアセトニド後部テノン嚢下注射
- 26 27歳の女性。健診で右眼の眼底に異常を指摘されて来院した。自覚症状はない。視力は両眼ともに1.2(矯正不能)。右眼眼底写真、OCT像、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図26A、26B、26C、26Dに示す。
診断に有用な検査はどれか。
- a 眼窩CT b 胸部X線 c 眼窩MRI d 全身PET-CT e ⁶⁷Gaシンチグラフィ
- 27 22歳の女性。1週間からの右眼の霧視を訴えて来院した。両眼に角膜後面沈着物を伴う虹彩炎を認める。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図27A、27Bに示す。左眼もほぼ同様の所見である。
行うべき検査はどれか。2つ選べ。
- a HLA b 胸部CT c 前房水ウイルスDNA PCR
d 抗SS-A抗体、抗SS-B抗体 e インターフェロンγ遊離試験
- 28 別図28に示す視標の検査目的はどれか。
- a 調節 b 変視 c 色覚 d 立体視 e 不等像視
- 29 54歳の女性。小児期から複視があった。最近、頻繁に複視が出現し日常生活に不自由を来すようになり来院した。9方向眼位写真を別図29に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 女性に多い。 b 動眼神経麻痺である。 c 顔を左に回すのを好む。
d Duane症候群I型である。 e 左外直筋後転術の適応である。
- 30 2歳の男児。首を傾けて物を見るため、整形外科を受診したところ、紹介されて来院した。水平と上方を見たときの眼位写真、両眼開放と片眼遮閉での頭位写真を別図30A、30Bに示す。
考えられるのはどれか。
- a 弱視がある。 b 眼位性眼振である。 c 右外転神経麻痺である。
d 眼底は外方回旋している。 e 右頭部傾斜で上下偏位が増大する。
- 31 35歳の男性。昨日から左眼の急激な視力低下と眼球奥の激痛のため来院した。矯正視力は右1.0、左0.1。眼底検査で左視神経乳頭の発赤を認める。眼窩造影MRI画像を別図31に示す。
最も考えられるのはどれか。
- a 眼窩蜂巣炎
b 視神経鞘髄膜腫
c IgG4関連眼疾患
d 抗アクアポリン4抗体陽性視神経炎
e 抗ミエリンオリゴデンドロサイト糖蛋白(MOG)抗体陽性視神経炎

32 49歳の男性。左側頭部痛、右手足の動かしにくさ、右側の見えにくさを訴えて救急外来を受診した。視力は右0.4(1.2×-4.00 D)、左0.4(1.2×-4.00 D)。右眼は相対的瞳孔求心路障害(RAPD)陽性。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。Humphrey 視野(30-2プログラム)検査の結果を別図 32A に示す。

この症例のMRI画像は別図 32B のどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

33 35歳の女性。頭痛と複視を主訴に来院した。正面視写真、9方向眼位写真、MRI画像、MRA画像を別図 33A、33B、33C、33D に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a もやもや病 b 内頸動脈解離
c 海綿静脈洞血栓症 d 特発性内頸動脈海綿静脈洞瘻
e 内頸一後交通動脈分岐部脳動脈瘤

34 55歳の女性。飛蚊症を主訴に来院した。視力は右1.0(矯正不能)、左0.8(1.2×+0.50 D)。眼圧は右16 mmHg、左15 mmHg。左眼眼底写真とHumphrey 視野(30-2プログラム)検査の結果を別図 34A、34B に示す。

適切な対応はどれか。

- a 硝子体手術 b 高圧酸素療法 c 緑内障点眼治療の開始
d ステロイドパルス療法 e 中心フリッカー値の測定

35 60歳の女性。原発開放隅角緑内障で点眼治療を行っている。右眼の眼脂を主訴に来院した。両眼の前眼部写真を別図 35 に示す。

右眼に使用している緑内障治療薬はどれか。

- a ブリンゾラミド b ラタノプロスト c ピロカルピン塩酸塩
d ブリモニジン酒石酸塩 e チモロールマレイン酸塩

36 55歳の男性。人間ドックで左眼の視神経乳頭陥凹拡大を指摘されて来院した。左眼の矯正視力は1.0。眼圧は16 mmHg。中心角膜厚は520 μm。眼底写真、黄斑部のOCT検査、隅角写真、Humphrey 視野(30-2プログラム)検査の結果を別図 36A、36B、36C、36D に示す。

適切な対応はどれか。

- a 頭部MRI b 追加検査不要 c 眼圧日内変動測定
d 3か月後に視野検査 e ベースライン眼圧を測定の上、眼圧下降治療開始

37 52歳の女性。増殖糖尿病網膜症に伴う血管新生緑内障に対して、両眼の線維柱帯切除術を5年前に受けた。以後、網膜症と眼圧経過は落ち着いていたが、1年間通院が途絶えた後、右眼の視力低下と眼痛を訴えて来院した。矯正視力は右手動弁、左1.0。眼圧は右52 mmHg、左18 mmHg。右眼細隙灯顕微鏡写真と前眼部OCT像を別図 37A、37B に示す。

適切な対応はどれか。

- a 白内障手術 b 毛様体光凝固術
c レーザー虹彩切開術 d ピロカルピン塩酸塩の頻回点眼
e 緑内障チューブシャント手術(プレートのあるもの)

38 64歳の男性。右眼に増殖糖尿病網膜症による血管新生緑内障を発症した。隅角鏡検査では全周に周辺虹彩前癒着を生じている。前眼部OCT像を別図 38 に示す。

隅角底の位置はどれか。

- a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤

- 39 78歳の女性。原発開放隅角緑内障に対して線維柱帯切除術を行なった翌日の診察で、眼圧が30 mmHgで濾過胞の形成不良がみられた。
眼圧を下降させる処置に使用するレンズは別図39のどれか。2つ選べ。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 40 1歳9か月の男児。壁掛け時計が落下し右内眼角部を受傷したため来院した。来院時の外眼部写真と術中写真を別図40A、40Bに示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 早急な手術が必要 b 鼻涙管損傷を合併 c チューブ留置が必要
d 上部涙小管損傷を合併 e 涙嚢鼻腔吻合術が必要
- 41 4か月の乳児。小児科から眼底検査を依頼されて受診した。体幹に紫斑が複数か所ある。眼底写真を別図41に示す。
今後行うべき対応はどれか。2つ選べ。
a 経過観察 b 遺伝子検査 c 頭部CT検査
d 成長発育曲線の評価 e 調節麻痺下屈折検査
- 42 78歳の女性。左眼白内障術中皮質吸引時に操作困難となった。術中写真を別図42に示す。
次に行うのはどれか。
a 縮瞳 b 前囊染色 c 残存皮質吸引 d 眼内レンズ挿入 e 粘弾性物質の前房内注入
- 43 67歳の男性。生来両眼とも視力不良で過去に両眼とも虹彩に対するレーザー治療の既往がある。最近右眼の白内障の進行を指摘されて手術目的で来院した。初診時の視力は右0.04(0.2×+16.00D)。眼圧は右13 mmHg。右眼の生体計測値は眼軸長15.38 mm、前房深度2.62 mm、水晶体厚5.54 mmで、眼底は透見困難であった。散瞳時の右眼前眼部写真を別図43に示す。
この疾患によくみられる所見で誤っているのはどれか。
a 強膜の菲薄化 b 瞳孔ブロック c 脈絡膜の肥厚
d 水晶体の前方移動 e 虹彩根部の形成不全
- 44 76歳の女性。左眼の角膜内皮移植術後1年で視力低下を訴えて来院した。左眼細隙灯顕微鏡写真を別図44A、44Bに示す。
最も可能性が高いのはどれか。
a 角膜潰瘍 b 拒絶反応 c 細菌性眼内炎
d サルコイドーシス e サイトメガロウイルス角膜内皮炎
- 45 10歳の女児。ムコ多糖症I型(Hurler症候群)で幼少時から角膜混濁を認めたが、近年混濁がより強くなったため来院した。細隙灯顕微鏡写真を別図45に示す。
適切な術式はどれか。
a 角膜内皮移植 b 全層角膜移植 c 表層角膜移植
d 深部層状角膜移植 e 治療的レーザー角膜切除(PTK)
- 46 5歳の男児。全身麻酔で左眼の斜視手術を受けることになった。術中写真を別図46に示す。
斜視鉤がかかっている筋について正しいのはどれか。
a 下転筋である。 b 内方回旋作用がある。 c 下直筋の眼窩側を走行する。
d 図の右側で後方に向かう。 e 図の右側で眼球に付着する。

- 47 72歳の女性。右眼の線維柱帯切除術の翌日の眼圧は右 21 mmHg, 左 10 mmHg。白内障手術の既往はない。術翌日の両眼の細隙灯顕微鏡写真を別図 47 に示す。
正しい処置はどれか。
- a 眼球マッサージ b アトロピン硫酸塩点眼 c 圧迫眼帯
d レーザー切糸術 e 前房への粘弾性物質注入
- 48 88歳の男性。右眼霧視を主訴に来院した。矯正視力は両眼ともに 0.9。眼底写真, フルオレセイン蛍光眼底造影写真, インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真, OCT 像を別図 48A, 48B, 48C, 48D に示す。
適切な治療はどれか。
- a サプリメントの内服 b 光凝固 c 光線力学療法
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射 e 抗 VEGF 薬硝子体内注射併用光線力学療法
- 49 65歳の女性。昨日から左眼の急激な視力低下を自覚して来院した。矯正視力は左 0.03。眼底写真を別図 49 に示す。
正しいのはどれか。
- a 抗凝固剤投与 b 光線力学療法 c 抗 VEGF 薬硝子体内注射
d 硝子体内ガス注入 e 硝子体手術
- 50 66歳の女性。右眼の視力低下を主訴に来院した。矯正視力は右 0.06。右眼の OCT 像を別図 50A に示す。硝子体手術とガスタンポナーデを行った。術後 2 週の矯正視力は右 0.1。網膜裂孔はみられない。OCT 像を別図 50B に示す。
適切なのはどれか。
- a 経過観察 b 副腎皮質ステロイド内服 c 硝子体腔ガス注入 d 輪状締結 e 硝子体手術